インフィニットストラトス～いまだに明けぬ満月の聖夜～

クィアラキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニットストラトス～いまだに明けぬ満月の聖夜～

【Ｎコード】
Ｎ１６９３Ｚ

【作者名】
クィアラキ

【あらすじ】
ＩＳ、それは女性のみが動かせる最強の兵器。
それを動かした男性がいるなど、等の昔に忘れられていた。
その時、俺は考えもしなかった。
まさか俺が、二人目という運命を背負うことになるとは・・・・。

プロローグ

夢を見ていた。

とある少女の夢。

この夢は俺の記憶がある１２才の時から見続けている。

だが、今のは少し違っていた。

「やっと、会えるね。」

確かにそういった。

しかし、その言葉の意味は分からない。

俺は逃避するように外を見る。

高速移動する飛行機から、巨大な物体が見えた。

・・・・・国立ＩＳ学園。

世界で唯一のＩＳ操縦技能訓練学校。日本の東京湾に浮かぶ東京と同じ位の巨大な物体。

２０２５年、つまり今から２５年前のＩＳ戦争時、増え続けるＩＳ需要に対応するために作られ、当時確率した巨大ＩＳ技術により海上に浮かせて十分な面積を確保した。

言うなれば、巨大なＩＳの上に建つ学校、それが今のＩＳ

学園の姿。

そして、俺、月影裂夜の受験する学校でもあった。

現在では、起動のみを無人ＩＳに任せ、内部で操縦する巨大ＩＳ技術（巨大と言われているのは無人ＩＳ搭載と操縦の都合上大型にせざるおえないから。）が発達しており、男性でも擬似的にＩＳを動かせるのだが・・・・・。

（・・・・女子多いな・・・・・・。）

機内はほとんどが女性だった。

ＩＳ学園は通常ＩＳ操縦学科と巨大ＩＳ操縦学科に別れ、通常ＩＳ操縦学科は言うまでもなく全員女性で、巨大ＩＳ操縦学科も女尊男卑の考えが根付いているため女性優先で合格する。

そのため、定員１０００名中男性は５０名程度だ。

（・・・・何でだろうな・・・・・・。）

俺は記憶がある１２才の時からある欲求があった。強迫観念といってもいい。

俺はＩＳ学園に入らなければならない。そういった言葉が頭の中を支配していた。

あそこに行ったら分かるのだろうか？

何故俺はＩＳ学園に行きたいのか。

そして、夢の中の少女は一体誰なのか・・・・。

やがて到着のベルがなる。

俺はまだ、歴史上二人目という運命を背負うことになることを、まだ知らない・・・。

リフレイン

ＩＳ学園アリーナ　１０：００

もうすぐ学園見学のデモンストレーションが始まろうとしていた。アリーナ内は見学来た中学生で溢れている。見たところ女子が９５％。男子は数えられる位しかいない。

・・・・・・正直言うと大変肩身が狭い。（と、言いつつも特等席を陣取っているのだが。）

このデモンストレーションでは代表候補生の模擬戦闘と新型ＩＳの起動実験が行われる。この起動実験は世界で初めての９世代ＩＳとして世界各国から注目されている。

・・・・と、そこで、

『皆様、お待たせいたしました。これよりデモンストレーションを開始いたします。』という放送が流れた。

『・・・・以上で、教頭先生のお話しを終わります。』

教頭のクソ長い話があったせいで会場がざわざわしていた。

『模擬戦闘の準備があるのでしばらくお待ちください。』

と、そこで

警報が響いた。

「つッ！！」

『警報発令、警報発令、一般生徒、及び見学者はシェルターに避難してください。』

先ほどとは違い、無機質な声が避難を促す。上空を見上げると複数のＩＳが交戦して・・・・

「え・・・・・・・？」

そこで凄まじい既視感に襲われた。俺の視線は複数のＩＳと交戦している白いＩＳに釘付けになった。

（あの機体を・・・俺は知ってる？）

それは、失った筈の記憶　のなかにあった、白騎士という名のＩＳ　だった。

コンタクト

上空の戦闘は激しさを増していた。流れ弾が当たり、学園が破壊されて行く中で、裂夜は白騎士を追って移動していた。真上で戦闘が行われているため、流れ弾が降り注いでくるがそれをすべて紙一重で回避する。

「うっ！！！！！」

突然一機のＩＳが目の前に現れた。いや、とんで来たという放が正しい。どうやら襲撃者のＩＳの攻撃を受けてここまで飛ばされたようだ。

「ちょっとあなたなにやってるの！！？早くシェルターに・・・・・」

そして敵ＩＳの砲撃を受けて吹っ飛んだ。

「きゃあああああ！！」

「ぐうぅぅぅ！！？」

その衝撃で裂夜も１０メートル吹き飛ばされた。

「いっつ・・・・・・・」

激痛が体を走るが、目立った出血もなく手足もちゃんと動く。

先ほどのＩＳは５０程吹き飛び格納庫らしきものの壁にめり込んでいた。絶対防御が有るため命に別状はないだろう。

それを確認して、裂夜はまた白騎士を目指して走り出した。

熱かった。とある研究所の中で俺は火に包まれた。身体は重度の火傷で何も感じなくなっていた。勢いを増す火の手に酸素を奪われ、呼吸できない苦しさから楽になろうと目を閉じた。

その直前に見えたのは・・・・・

白騎士に乗った一人の少女だった。

「はあ、はあ・・・・・ッ！！」
白騎士に近づくに連れて忘れていた何かを思い出していく。まるで頭のなかに鍵があって、それが段々外れていくように。
目の前に流れ弾が降り注ぎ地面のコンクリートを撒き散らす。当たれば一発で致命傷になる塊を拳で弾く。
あの火災で身体の大半を失った俺は、それを機械で補った。恐らく脳ミソに何らかの細工をされて記憶を封じられていたのだろう。
そして、白騎士が校舎に向かって落ちていくのがみえた。

ほとんど廃墟と化している校舎の中に白騎士は倒れていた。先程の攻撃でシールドエネルギーは０になり、パイロットの少女はあばらを数本折っていた。
（うっ・・・・、白椿を取りに行かないと・・・）
元々白騎士は完成したばかりの機体で彼女の専用機ではない。起動実験で白騎士を装着した直後に襲撃されたため慣れない機体での戦闘を余儀なくされた。
（つう〜・・・・・）
自分の専用機を取りに行くため白騎士を降りる、そこで
敵のＩＳがまだ白騎士を狙っていることに気づいた。
「あ・・・・・・」
無数の銃弾が彼女に向かって放たれた。
裂夜は少女に銃弾が降り注いでいくのを見ていた。

「クッソ・・・・間に合うか！？」
全速力で走り出した。少女まで１０メートル。少女はただ降り注ごうとしている銃弾を見て呆然としていた。
「うおぉぉぉぉ！！」
少女を突飛ばし、１秒前までいたところに銃弾が降り注ぎ・・・・
爆発が起こった。

「ぐあぁぁぁぁ！！？」
すぐ背中で起こった爆発は裂夜と少女を吹き飛ばした。

『気付いて・・・・・・』
暗い空間の中に透き通った・・・夢の中の少女の声が響く。
『すぐ近くにいるから・・・・』
そして・・・・

目を覚ました。だが、目を開けても何も見えない。
（・・・・あれ・・・・何で・・・・）
直後、大量の情報が頭のなかに流れ込んできた。
「がぁっ！？」
突然流れ込んできた情報に脳が悲鳴をあげる。
そのなかに
《現在、シールドエネルギー４０％まで回復》
《敵ＩＳ４０機を確認》
《敵砲撃、着弾まで５・４・３》
「ツッ！！？」
《２・１》
「うおぉぉぉぉ！！？」

とっさに横に跳ねる、そして

三度目の爆発に巻き込まれる。

しかし、

（・・・・？）

先程のような衝撃を感じない。その代わりに

《シールドエネルギー３５％まで減少》という情報が頭のなかに

直接浮かぶ。

（まさか・・・・）

（ＩＳ　を動かしているのか？）

Fallen night (knight)

すぐに頭が切り替わる。
敵勢力４０。機種は全てラファールリバイバル2、中距離攻撃型の機体。対して味方は量産型白椿１５、量産型甲龍5、専用機は無し。
様々な情報が頭のなかに入り、逐次更新されて行く。
必要な情報を整理。現在敵勢力１５、白騎士の性能をもってすれば殲滅可能ッ！！
（やるしかないッ！！）
そうと決まれば話しは早い。白騎士の性能データの中から操作方法と装備を頭にインストールする。・・・・・完了。
いつの間にか手のなかにオーソドックスな形の洋剣が握られる。
・・・・9世代装備、レーザー塑形システム〝陽炎〟。
展開装甲の最新システム。展開装甲のみで形を作るシステム。従来は専用の砲門からしか展開できなかったが、このシステムにより理論上、展開できる数に限りがない。
それにより握られた二本の洋剣を持ち、
「はあぁぁぁぁぁぁ！！！」
戦闘を開始する！！

戦局は傾いた。白騎士の復帰により襲撃者の戦力は大きく減っていった。
〔潜水ＩＳ艦、ポセイドン。〕
そこに襲撃者達のリーダーはいた。
「すごいな。あんたの言うとうりだ。」

艦内にハスキーな女性の声が響く。
『えへへ♪そうでしょ！』
対してモニター越しに少女の声が響く。
その少女の声をした何者かが彼女たち。《エル・ドラゴ》の以来主だった。
その少女の声をした何者かは、いつもおでけているが、ＩＳの手配、ＩＳ学園専用のステルス機能の開発。また、戦局まで予言して見せた。
「あのＩＳをパイロットごと捕獲すればいいんだな？」
『うん！そうだよ。あとは頑張って！』
そして通信回線が閉じられた。
「・・・・全く、得体の知れない女だ・・・。」
そして、
「さあ！！最後の仕上げと行くよ！！残存勢力を全て出しな！！」
『うおぉぉぉぉ！！！』
（さあて、どこまで私を楽しませてくれるのかね！！？）

「はあぁぁぁ！！！」
持っていた二本の剣を投擲し、また剣を生み出す。
残存敵勢力、残り５。
一番近くの一機に肉薄し、こちらに向けていた銃口ごと切り裂く。
切り裂かれた機体はエネルギーを失い下に落ちる。
「はあ、はあ・・・・・」
シールドエネルギー残り３０％。だが自分の体力の方が限界に近づいている。日々の鍛練で体力に自信がある方だが、直前の全力疾走でほとんどを使い果たしていた。
（残り・・・４！）
４つの剣を生み出し指の間に挟む。

（一気に決める！！）
そして４つの剣を投擲しようとしたその時、
『下がって！！』
突然入った通信とともに無数の砲撃が敵勢力を凪ぎ払った。
（援軍・・か？）
どうやら交戦していたＩＳ学園の機体が援護しに来たようだ。
『ちょ・・・あなた爽夏じゃ無いわね！？何で乗ってるの！？』
「いや、それに関してはこっちが聞きたいぐらいなんですが・・・・」
『えっ・・・・あなたもしかして男な・・・』
突如銃弾の雨が降り注ぐ。
「ぐっ！！？」
無差別に放たれた銃弾を咄嗟に生み出した二本の剣で弾く。ものすごい轟音が響き鼓膜を叩く。
そして、銃弾がやんだ。
「はあ、はあ・・・・」
シールドエネルギー残り２０％。満身創痍の中顔をあげると。
「ふん。好き勝手やってくれて。」
２０機のＩＳを従えた一機の専用機がいた。あの機体は・・・・。
「ゴールデン・ワイルドハント・・・！！」
第８世代のイギリス軍から盗難され、ある傭兵軍団に使われている機体。５０の砲門をもつ、大軍殲滅型ッ！！
「ほう、まだエネルギーが残っているのか。だが、」
全敵勢力の砲門が向けられ、
「これで終わりだ。」
一斉に放たれた。

・・・・暗い空間にいる。

『こっちだよ・・・・』
夢の中の少女がこちらに手を伸ばしている。
『早く・・・・』
俺も手を伸ばす。
『もう少し・・・・』
そして、二つの手が触れた。

「回収しろ。」
襲撃者、エル・ドラゴのリーダーは失望していた。
（少しは楽しめると思ったんだが・・・・）
そこで通信が入る。
『な、まだ動いて、う、うあぁぁぁ！！？』
「おい、三番機、応答しろ！三番機！！」
視界は砲撃で巻き上げた煙で何も見えない。
そうしている間にも次々と悲鳴が聞こえ、通信が途絶える。
（一体なにが・・・・・。）
煙が晴れる。そして・・・・
黒騎士がそこにいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1693z/

インフィニットストラトス～いまだに明けぬ満月の聖夜～

2012年1月4日04時48分発行